印象１７編 —2021 年７月の総評に代えて

〇林　　桂〇

＊春町美月氏を五編選ぶ結果となった。黄金期としての幼年への回想、そして解体されつつある現在としての家族。それが表裏となっている世界が春町氏の世界であることを、五編を読んで思わされた。

●風船●（東京都）
小雨の日
小石を蹴って思い出す
たくさん届いたお祈りメール

＊雨の時期に、就職の内定は出る。なかなか内定のでない辛かったそのころを、改めて思い出しているのだろう。

●風船●（東京都）
あの時人を待っていた
オサマ・ビンラディン氏殺害の
速報流れる改札前の柱で

＊電光掲示板に速報として流れたのだろう。そのとき、自分は何処で何をしていたか。鮮やかに記憶に残ることがある。俳人・森澄雄は三島由紀夫の割腹自殺のニュースを古書店で聞いたと書いていた。衝撃的な死のニュースは、自分のい

る場所とセットで記憶されるものかもしれない。

●長谷川柊香●（宮城県）
指鉄砲撃って
わずかに
　蝶
しずむ

＊蝶の上下する飛び方が、あたかも「指鉄砲」の空砲があたったかのよう見えたのである。「蝶」が一文字沈んでいる表記も工夫されている。

●鎌倉まくら●（宮城県）
夏めいて句点は息を継ぐかたち

＊古典籍には句点も読点もない。近代的な表記の句点は、確か「息を継ぐかたち」に違いない。

●まちりこ●（埼玉県）
街の灯はもえているかい
ハムサラダ

＊「ハムサラダ」の取り合わせが巧みだ。都市生活の清澄さと淡い寂しさを感じさせる。坪内稔典の面影を感じさせる句だ。

●春町　美月●（大阪府）

風鈴を割ってしまいました

もう
庇ってくれるひとのいない夏

＊風鈴はガラス製のものだろう。その粗相を叱ってくれる人がいない。それは庇護者の不在と同じである。緩やかに家族は解体され続ける。

●藤ほたる●（神奈川県）

夜空の
最も淡いところで暮らしている

＊身近にあかりを灯して夜の生活を続けている私達だ。それは「夜空の／最も淡いところ」に住んでいることに違いない。孤独感が滲む。

●春町　美月●（大阪府）

フウセンカヅラの窓辺
カルピスの包み紙を
もう一度
瓶のかたちに戻したね

＊カルピスと言えば、水玉模様の紙に包まれた瓶が一般的だった。飲むためにコップに注いだあと、また包み紙をもとのように戻す。丁寧に大切に飲んでいたの

だ。

●まちりこ●（埼玉県）
マトリョーシカみたいな
可愛い五人のおばあちゃんが
並んで
牛乳を飲んでいる

＊どうしたらこんな風景が現れるのだろう。西東三鬼に「緑蔭に三人の老婆わらへりき」があるが、「老婆」であり、やや違和感のある風景のようだ。こちらは「可愛い」「おばあちゃん」。しかも五人。

●春町　美月●（大阪府）
病院で父の足の爪を初めて切った

＊髪、髭、爪の処理は、看護に欠かせないものになってくる。「初めて切った」に、作者の思いは溢れている。

●春町　美月●（大阪府）
あやふやに揺れる世界が
不意に濃密になる所
例えば
赤ん坊に握られた指先とか

＊大人の指を握るのがやっとのような赤ん坊の手で指先を握られる。まだ、目は見えていないかもしれない。その繋がれ

たところが最も濃密な所という感覚。何ごとかを託され、託したという感覚だろうか。

●茶和鈴●（東京都）
発電機の音と蟬の声
日射しで溶けそうな
工事のおじさんだけがいる

＊夏の日盛りの中で、工事を続ける人の影以外は見えない。「溶けそうな」が、猛暑のさまを伝える。

●まちりこ●（埼玉県）
試供品ひとつもらって
この街の
一番静かな場所まで
歩く

＊「一番静かな場所」とは、恐らく自室。何気なく見える最終行の「歩く」がいい。「戻る」では書けない、物憂い道行き感が表現されている。

●広田　土●（大阪府）
「シャチのおなかは何色なの？」
と、図鑑と人形
両手に問う息子よ

＊確かにシャチのお腹の色を教えてくれる図鑑も資料も見つからないだろう。ある評論家が自身の幼稚園受験の体験を語っていたのを思い出した。大きさの違うキューピー人形を見せられて、どこが違うか尋ねられて、お腹を切ってみなければ解らないと答えて、不合格になったというものだった。見えないところへの興味、関心の方が本質的な気がするのだが。

●春町　美月●（大阪府）
入道雲に
虫取りあみでぶらさがり
おとうさんが帰ってくるのを
待ってた土曜日

＊単身赴任の父を待つ夏休みの土曜日か。最初の２行の巧みさに惹かれる。どこかまだ夢と現実の入り交じった小学生のころの思い出か。

●茶和鈴●（東京都）
色鉛筆の赤と金を
８月中に買い足さなきゃ

＊色鉛筆の赤の使用頻度が高いのは一般的だろう。金は夏のお絵かきの特別な色なのだろう。だから夏休みが終わる前に買い足す必要があるのだ。

●藤ほたる●（神奈川県）
風には膜が張っていて
みんな亡霊みたいに
それをかぶって
歩いているんだよ

＊顔に当たる風を「膜」のように感じる。そのような感性を持ち合わせていなかったが、この一編に出会って、俄に説得させられる。

●大橋　弘典●（群馬県）
月彦全句集を抱き汗の腋

＊藤原月彦は、歌人の藤原龍一郎の若き日の俳号。俳句の筆を折り、歌人となったが、ニューウェイブ世代の俳句の旗手の一人であった。第一句集『王権神授説』は稀覯本扱いとなっている。現在の若い世代にも読んで欲しい作家である。先頃、全句集が刊行された。